

グローバルスコープ

6月27日にCNNが主催したバイデン米大統領とトランプ前大統領による討論会のテレビ中継を見た多くの人は、「81歳という高齢のバイデン氏に大統領職はもう無理ではないか」という感想を持っただろう。声はかすれ、トランプ氏の激しい攻撃に対して切り返す力に欠け、その表情はうつろだった。直後の世論調査では67%対33%という大差で討論会におけるトランプ氏の勝利が報じられた。NYタイムズ紙はバイデン氏の撤退を論じ、民主党からも公然と撤退が望ましいという議論が沸き上がった。しかし、バイデン氏

米大統領選討論会から見たもの

11月の大統領選挙で再び対決するバイデン氏（左）とトランプ氏（AFP時事）



が撤退するのは本人の意思次第ではあるものの、周りにはシル夫人も含め誰も撤退を勧めない。人はいないようだ。同時に世論調査でも討論会の不首尾が必ずしもバイデン氏の支持率に大きなインパクトを持っていないという結果も報じられ、撤退論

国を象徴する「力」の具現カギ

の行方は今のところ不透明だ。実際、党大会まで1カ月余りという時期に候補者をすげ替えるのは簡単ではない。二期目を狙う現職大統領は、圧倒的に強い。二期目を狙った11人の現職大統領のうち、敗北したのはわずか4人だ。このうちフォード大統領はニクソン氏の辞任に伴って就任し、1976年の選挙で敗北した極めて例外的なケースだ。このほか80年のカーター大統領、92年のブッシュ大統領、そして20年のトランプ氏だ。

カーター、ブッシュの両氏に共通して言えることは大統領としての「弱さ」が目についたことだ。カーター氏については駐イラン米大使館の館員が人質に取られ、救出することができなかった。ブッシュ氏は日本との大幅な貿易赤字をめぐり強い批判を浴びただけではなく、92年1月の訪日の際、晩餐会の席上で嘔吐して倒れるという姿が、米国の弱さを象徴していると受け止められた。

米国大統領の評価は必ずしも道徳的な正しさではなく、米国を象徴する「力」を具現しているかどうかだ。トランプ氏が前回の大統領選で敗北したのは「強さ」を示す以前に、規格外の大統領として極めて強い反発を買ったからなのだろう。今回、選挙ではトランプ氏は高齢のバイデン氏との対比で「強さ」を演じ出すだろうし、バイデン氏はトランプ氏が犯罪人であることを強調するのだろう。11月の選挙までの4カ月間はバイデン氏にとって厳しさが増すだろう。高齢問題もさることながら、ガザ戦争で多数の民間人死者を出すイスラエルの強硬な攻撃を止められないバイデン氏への批判とつながる。中間選挙での民主党の善戦は2世代の投票率が増えたか、若いうちが民主党から離れば、バイデン氏に勝機はないのかもしれない。



日本総合研究所 国際戦略研究所 特別顧問

田中均

（第2・4水曜日に掲載）